

Title	戦いの描写における伝統的な言語文化： 『大造じいさんと雁』から『平家物語』 「敦盛最期」 「木曾最期」へ
Sub Title	
Author	須藤, 敬(Sudo, takashi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2010
Jtitle	三田國文 No.52 (2010. 12) ,p.1- 13
JaLC DOI	10.14991/002.20101200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20101200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈戦い〉の描写における伝統的な言語文化

——『大造じいさんと雁』から『平家物語』『敦盛最期』『木曾最期』へ——

須藤 敬

現行の国語教科書の教材採用状況を見ると、相当数の生徒が小学校五年生で『大造じいさんと雁』を、中学二年生で『平家物語』の「敦盛最期」か「那須与一」を、そして高校・国語総合で『平家物語』『木曾最期』を学んでいくことがわかる。これらの教材（『平家物語』は教科書に採られた本文部分だけを読解の対象とした場合）にはいくつかの共通点がある。それは教室で読むに際し、〈なぜ戦うのか〉という問いよりも、〈いかに戦うべきか・いかに戦ったのか〉という問いの方が優先すること、またその答えとして〈潔さ〉という観念が答えとして用意されていること、そしてそれらを支えるものとして、イメージとしての武士道観があること等である。

『大造じいさんと雁』の残雪は、隼との戦いに傷つき大造じいさんに生殺与奪の権を握られると、「じたばたさわ」がず、「最期のときを感じて、せめて、頭領としてのいげんをききつづけまいと努力しているよう」だと描かれる。『平家物語』の平敦盛は、首を掻くことを躊躇する熊谷直実に対し、「とくとく首をとれ」と言い切る。那須与一は、扇的を射はずしたら、「弓きり折り自害して、人に面をむかふべからず」と思う。戦

いに敗れた今井兼平は「日本一の剛の者の自害する手本」と言
って、太刀を口にくわえ馬から逆様に落ちる。

結果としての生死はそれぞれだが、いずれも潔く死を覚悟する様子が描かれている。小・中・高の各定番教材にそうした場面があることについて、教室ではどういうことを視野に入れるべきか、特に生徒の批評性を養うという観点から考えてみたい。

一 『大造じいさんと雁』

教室での文学作品の読解は、人と、人もしくは自然や社会といったある状況との関係性と、その関係性の変化を捉えさせる作業になる場合が多い。『大造じいさんと雁』の教材論も多くは大造じいさんと残雪の関係、そして大造じいさんの変容に焦点を当てている。では大造じいさんを変えさせたものとは何であったのか。

生徒はまず大造じいさんに狡さを感じ、反発する。指導書の中には生徒の大造じいさんに対する反発を懸念して、狩人として、生活者としての大造じいさんの人物像にも理解が及ぶよう配慮すべきことを記述しているものもある。しかし狩とか漁で

道具や仕掛けを用いるのは当然のことで、生徒が実際にそうした生業に従事している人々を狡猾な人間だと思ふことはない。生徒が大造じいさんに狡さを感じるのは、残雪が立派な頭領として擬人化されているからである。そこで考えたいのは、そのように擬人化された残雪像が、大造じいさんに己の「ひきょう」さを感じさせ、「堂々と戦おう」と言わせていることを、本作品の読み手が了解できてしまうのはなぜなのか、ということである。

戦いの場面において、卑怯とか狡さとはどういう場合に感じられるのだろうか。それはある軍事行動が知略に基づく奇襲なのか、卑劣な騙し討ちになるのか、その解釈の差はなぜ生じるのかということでもある。このことについては佐伯真一の、古代の戦いにおいて敵が野獣のような存在だと認識されれば、獣を異にかけるのと同様、騙し討ちも肯定され、朝廷による夷討伐でも、文化・文明の側の人間が自然・野蛮の側に属する獣を狩るような感覚があった、という指摘が参考になる。その感覚は近現代の戦場においても、人はなぜ残虐になれるのかということへの一つの解答になっている。訓練と宣伝によって敵を徹底的に非人格化、擬動物化することは、人を殺すことに対する心理的抵抗感を取り除く有効な方法として国家や軍隊で採用されてきた。第一次世界大戦に取材した戦争小説と、イラク戦争に従軍したアメリカ兵の言葉から一例ずつ挙げる。

○「だがおれたちより、もつと敵のほうが瞞されているぞ」と僕は答えた。「あの捕虜の持った宣伝パンフレットを見てみねえ。あの中じゃ、おれたちがベルギーで子供を喰

つたつて出ているぞ。」(レマルク『西部戦線異常なし』秦豊吉訳)

○人を非人間化するために「ハジ(米兵が頻用していたイラク人に対する蔑称)」という言葉が使われます。…人格もない、名前もない、ただのハジです。(アーロン・グランツ『冬の兵士』TUP訳)

生き物に名前を与え、人との対等な関係を語る文学がある一方で、人から名前を奪い取り、下等なものとして扱う現実もあるのである。しかし敵も自分と同じ人間であることに気付くと、敵兵を殺すことへの苦悩が生じる。それをモチーフとする小説も少なからずある。そのことは佐伯真一が、征夷という枠組みは保ちつつ野蛮な夷にも都人と同様の人間性を見出したところに、『陸奥話記』という軍記物語の成立があったとするのと通底する。

大造じいさんにとって、雁が「鳥類の中で、あまりりこうなほうでない」存在である間は、どのような手段を用いて捕らえようとしても、そのことについての葛藤は生じないし、「頭領らしい、なかなかりこうなやつ」、即ち「たいしたちえ」を持ち、「仲間を指導して」いるらしい残雪にしても、「がんとか、かもとかいう鳥」の頭領にすぎない。「様子の変わった所には近づかぬがよいぞ」と、残雪の心中が文語で大造じいさんに感じ取られるのも、「りょうじゅう」という文明の道具を持つ大造じいさんにすれば、残雪が前近代的な存在として捉えられていたことを示すものかもしれない。そうした残雪に対する大造じいさんの認識が「たかが鳥」以上のものになったのは、自ら

が犠牲となることを恐れず仲間を救おうとしたこと、またその結果もたらされた己の死に対する覚悟を見たからだ。それは「いかにも頭領らしい、堂々たる態度」であったため、残雪は大造じいさんにとつて語るに足る存在となった。軍記物語風に言えば、「合はぬ敵」だと思つていた相手に対し、なかなかあつぱれであると思つて改めたということである。

こうした残雪像と、それに対する大造じいさんの「窮鳥懐に入る時は、獵人もこれを殺さず」といった態度は、近代以降、本作品が刊行された戦時中まで、戦争のためさかんに用いられたイメージとしての武士道観に重なるものでもあつた。軍記物語では名譽のために死を厭わない武士が数多く描かれてきた。それは名のある職業戦士にとつての価値観であつたが、近代以降、徴兵された無名の素人兵にも適用された結果、戦場に多くの悲惨な状況が現出することになる。戦後、軍国主義に利用された武士道観は否定されたが、それでも戦時色の強い本作品が、いまだに教材として残つているのはなぜなのか。

その理由として本稿では次の二点について取り上げたい。一つは仲間を救うための自己犠牲の物語というものに対する抗し難さがあること、一つは潔さということが持つている美的イメージの強さである。

国家に強いられた犠牲であつても、その論理は「生と社会と国家のいたるところに見られる普遍性をもっているために、そしてきわめて強力であるがゆえに、なまやかな批判によつてはびくともしない」ものである。ましてや国家の言う大義のためではなく、故郷の美しい自然とそこに生活する家族を守るとい

うこと、また苛酷な戦場を共にしている戦友との信義を守るということに、戦わねばならぬリアリティある理由を見出し、己を犠牲にしていく兵士の物語となれば、人々に感動をもつて受け容れられてきたことは、それらをテーマにした小説や映画の多さが示している。

そしてその自己犠牲という行為は、死に対する潔さを求めることになる。「うなぎばり」の仕掛けて捕まつた雁が「さかんにばたついて」、辺り一面に羽を飛び散らせていたとする一方で、じたばたさわがない残雪が描かれる。ここでこのじたばたしないとは、生への執着を断ち切るということであろう。軍記物語の用語で言えば「思ひ切つたり」ということになる。生に執着することに見苦しきを見、潔さに価値を置く感性は世間で共有され、武士の振る舞いに圧力をかけてきたものでもあつた。それは戦場でどのような死に方をしてでも遺族には立派な最期であつたと告げ、遺族もまたそのことを期待するといった形で近代にも残り、さらには東條英機の自殺未遂に対する世間の受け止め方や、社会のトップ層にいる人々の身の処し方に潔さを感じられない時の現代のマスコミのパッシングにも見出せるものである。自己犠牲と潔さは、戦う者や頭領的立場の者に對し、我々が求め続けてきた姿でもあつたのである。

雁に名を与え頭領として擬人化していることが、読者の読みをどのような方向に導いているのか、そのこと自体を授業で扱うことがもつと考えられてもいいように思う。もしそれが小生の段階では難しいのであるならば、例えば中学または高校で教材として採用されている宮沢賢治の『なめとこ山の熊』を扱

う際に、小学校の時に読んだであろう『大造じいさんと雁』を再度、併せ読むといったことが考えられよう。狩猟者と自然との関わり方について、その描かれ方にはどのような違いがあるかを考えることで、あらためて生徒は『大造じいさんと雁』の作品の特性に気付くことにもなるし、批評性を養うこともできる。またそうしたことから小・中・高の連携はもつと模索されてもよいと思う。

二 『平家物語』『敦盛最期』

熊谷直実は押え付けた武者が自分の息子と同じ年頃でかつ容顔美麗であるのを見て、「助けまゐらせん」と言う。また相手の父親の気持ちを忖度し、「助けたてまつらばや」と思うのが、味方の軍勢がやってきたため「助けまゐらせん」とは思うものの、それが難しいことを言い、泣く泣く首を掻く。「助け」という単語を三回用いて直実の躊躇を表している。教科書の「学習」もそうした直実の気持ちの変化を問うものが多い。

戦死したことを聞いたら悲しむ家族が敵兵にもいるだろうと想像し、それでも軍隊という集合体においては個人の感情で事態を処理することができないということから生じる葛藤は、近代の戦争小説でもしばしばテーマとされるところであるが、それは即ち、相手が敦盛でなくても起こりえる感情であり事態であるということだ。では直実の気持ちを動揺させたものとして、ほかに何があるのか。

そのことを、敦盛はなぜ直実の招きに応じたのかということから考えたい。一の谷の戦場では忠度のように、敵に対し「こ

れはみかたぞ」と言って相手にしようとしめない、あるいは知盛のようにひたすら逃げる場合もあり、平家公達の誰もが堂々と戦っていたと語られているわけではない。覚一本以外の諸本では「イカゞ思給ケム、汀へムケテゾヲヨガセケル」(延慶本)と、浜に戻る敦盛の心中を量りかねるかのように語っているものもある。もし敦盛の心中を理解しようとするならば、「大将軍とこそ見まゐらせ候へ。正なうも敵に後ろを見せさせたまふものかな」という直実の呼びかけ、即ち敵に背中を見せるのは「正なし」という考えに敦盛が同意したからだ、と読むしかない。では「正なし」とはどのように用いられる言葉なのか。覚一本の他の七例を見てみる。

①木曾方に捕えられていた妹尾兼康が逃走する。それを追う倉光成澄の言葉。

「いかに妹尾殿、まさなうも敵にうしろをば見する者かな。返せやかへせ」(巻八「妹尾最期」)

②先陣争いで成田五郎にだまされた平山季重が成田に追いついた時の言葉。

「まさなうも季重ほどの物をばたばかり給ふ物かな」(巻九「一二之懸」)

③越中前司盛俊に首を掻かかれそうになったときの猪俣則綱の言葉。

「まさなや、降人の頸かくやうや候」(巻九「越中前司最期」)

④平重衡の自害を止めようとする庄四郎高家の言葉。

「まさなう候、いづくまでも御供仕らん」(巻九「重衡

生捕」)

⑤赤間関の海戦の先陣は自分だと言い張る義経に対する梶原景時の言葉。

「まさなう候。殿は大將軍にてこそましまし候へ」(巻十一「鶏合 壇浦合戦」)

⑥命が惜しければ助けようと言う義経に対する土佐房の言葉。

「まさなうも御錠候ものかな。惜しと申さば、殿は助け給はんずるか。」(巻十二「土佐房被斬」)

⑦塗籠に入ろうとする十郎藏人行家に対する常陸房正明の言葉。

「まさなう候。な入らせ給ひ候そ」(巻十二「泊瀬六代」)

いずれも会話文の中で、かつ敬語を伴って用いられている。即ち、ある者が身分的に同等か上位の者に対し、その言動の不適切であることを訴え、態度変更を迫る言葉だということがわかる。「正なし」と言われた者は、その多くが自分に向けられた批判を認めている。『平家物語』の他本や金刀比羅本『平治物語』等にも用例を見出すことができるが、その用いられ方はおおむね変わらない。「正なし」とは、ある身分以上の人の言動を正すために発せられる、強制力のある言葉だと言える。

こうして直実の呼び掛けに応じた敦盛は直実に押え付けられると、敦盛を助けたいという直実の気持ちに反応することなく、ただ「首を取れ」と言う。その敦盛の態度は直実の「あつばれ、大將軍や」という賛辞につながっていく。もし授業がそ

のことを押さえて終わってしまうならば、それは生徒に、戦いから逃れず、敗れば潔く死を覚悟するという一つのあり方を教えるだけということになってしまふ。

では多様な観点から「敦盛最期」を捉え直すためには、どのようなことが考えられるだろうか。同じ『平家物語』の中において、先に触れたような忠度や知盛の場合を紹介してもよいし、敦盛と直実のそれぞれが抱えている物語的文脈⁽¹⁶⁾を説明するという方法もあるだろう。また「逃げる＝正なし／戦う＝潔い」という価値観の枠組みを相対化するような視点、例えば「敵の身分のおおよそを名のり以前に識別し、手強そうなら危うきに近よらず、さつさと避退するのが賢い。卑怯ではなく戦巧者とはそういうものである」という現実的な「賢さ」「巧みさ」といった評価の観点もあること、軍記物語の世界には悪七兵衛景清のように「逃上手」「生上手」と呼ばれるような人物像もあったこと⁽¹⁸⁾等を、生徒に提供することも考えられよう。その上で、それでもなお「敦盛最期」がもてはやされるのはなぜなのか、ということを生徒に考えさせたい。

大造じいさんや直実の気持ちの変化を捉えさせるという学習活動は、大造じいさんや直実の気持ちを変えさせたものの持つ力の強さを確認することに向かう。その力の由来と、その力が読者の読みに及ぼす作用まで考えることが伝統的な言語文化を学ぶということになるのではないだろうか。

三 『平家物語』「木曾最期」

この教材でも義仲と兼平の場面ごとの気持ちを問うている教

科書が多いのだが、「義仲の死がどのようなものとして描かれているか、兼平の死と比べて考えてみよう」（筑摩書房）といったように、両者の死の様相を比較させようとするものもある。ではそのことよって何が見えてくるのか。それは死には美醜があるという発想である。

義仲は自害するため粟津の松原に向かって駆けていたが、深田にはまり込み動けなくなる。そこで「一所」で共に死にたいと思っていた兼平のことが気になり振り返ったところ、矢で射られてしまう。その結果、兼平が恐れていた「いふかひなき人の郎等」に「うたれ」という「口惜し」い最期を迎えることになる。深田にはまってしまったことは不可抗力として捉えることができるし、乳母子と「一所」で死にたいと思う気持ちから振り返るのも自然な動作である。それにも関わらず義仲の死に方は、「最後の時不覚しつれば、ながき疵にて候なり」という考え方に相当するものと生徒は読み、その読みは一方の兼平の「自害する手本」をより際立たせることになる。しかも兼平の名乗りには、「氏文読」（延慶本）とも呼ばれる名乗りの常套句である家の系譜や先祖の榮譽を称える文言がまったくない、また名乗れる官職も持たない。従って一個の戦士の壮烈な死という印象だけが読み手に残る。

二人の死の描かれ方を比較するという学習活動は、誰かを救うための死であったとか、犬死であったといった死の理由や意味についてではなく、死に方の美醜の問題を考えさせることになってしまふ恐れがある。「どうせ死ぬならば美しく死にたい」とは神風特攻隊員の言葉であるが、それは「潔く散る」という

ことと同義であり、なぜ戦うのか、なぜ死なねばならないのかという問いを棚上げせざるを得なかった結果の言葉であった。死を美醜で捉えるという発想には別の何かを不問にするという側面があったことに、ここでは留意しておきたい。

では徹底的に生き延びるとか、投降するという選択肢を選ぶことを躊躇させてきた感覚とはどのようなものであったのか。かつて生徒に「義仲や兼平が投降する、または生け捕られるという話だったら教科書に採られたらどうか」と問うたことがあるのだが、生徒は「そんな無様な話だったら採用されないと思うし、仮に読んだとしても面白くないだろう」と答えた。現代の高校生でもそうした感覚があることについて、死を逃れようとする行為の醜さを言い表す言葉には、例えばどのようなものがあつたのか、ということから考えてみたい。

一ノ瀬俊也の紹介によれば、明治以降の軍隊マニュアルには「潔く戦死する」という類の表現が随所にあつたことを知ることができる。ただそれらの中に生き延びた場合の挨拶文の例文もある。「おめおめと茲に生還（凱旋）將兵の謝辞」と題するもので、「戦友諸君が、重大なる任務遂行の為に或は名譽の戦死を遂げられ、或は重軽傷を負われて、輝かしき、武勲功績を樹てられたのに対し、何らめざましき働きも出来ず、おめおめと茲に生還しました私共は、寔に、これら幾多の陣没勇士諸君に對し、汗顔慚愧の至りであります」とある。これは一九三八年のもので、それ以降の挨拶マニュアルには「凱旋」という言葉は使ってはならないということになるそうだが、ここで注目したいのは、「生還する」という語を修飾する副詞「おめおめと」

である。なぜなら軍記物語にその淵源を辿れそうだからだ。それも生け捕られること、投降することに関わつての使用例が多い。

まず金刀比羅本『保元物語』には以下のような例を見出せる。⁽²³⁾

①心はたけくおもへども、親治をはじめとして、以下の郎等ども、王事もろき事なければにや、十二人おめおめといけどりにせられけるこそむざんなれ。(上巻「親治等生捕らるる事」)

②為朝：「…我等五六人は皆一方の大將軍を承べき器用のわか者共が、をめをめと頸をのべて、降人にいづるにも及ばず：」とぞ申しける。(中巻「為義降参の事」)

③為朝：暫こそ拳にて打除けれども、次第に力つかれにければ、心は猛く思へども、をめをめと生捕れけるぞ無慚なる。(下巻「為朝生捕り遠流に處せらるる事」)

また『平家物語』には次のような例がある。

①投降しようと言う兼平に対し) 義仲：「…十善帝王ニテオワストモ、甲ヲヌギ弓ヲハツシテ、ヲメラメト降人ニ成ルベシトハ覚ヘズ」(延慶本・第四「木曾可滅之由 法皇遠結構事」)

②田内左衛門きこゆる兵なれども：わづかに十六騎に具せられて、おめおめと降人にこそまいりけれ。(覺一本・卷十一「志度合戦」)

なお「おめおめと」の元の言葉と考えられる「おむ」には、次のような用例がある。

①為義：よに心得ざる夢想を見たる事候ふ。…教長「御刃程の大將軍の夢物語こそおめたる申し事なれ」(金刀比羅本『保元物語』上巻「新院為義を召さるる事」)

②難波三郎ばかり、夢見あしき事ありとて、供せざりしかば、傍輩ども「弓矢とる身の、何条夢見・物忌など云、さるおめたる事やある」と笑ひければ：。(古活字本『平治物語』巻下「清盛出家の事並びに瀧詣で付けたり 悪源太雷電となる事」)

夢によつてもたらされた不吉な予感に怖気づく武士が批判・嘲笑の対象になつている。戦いの結果としての死を恐れ、回避しようとする姿を表す言葉が「おめおめと」なのである。伊藤整はレイテ島壊滅の報を聞いた時、自身の『太平洋戦争日記』(昭和二十年二月八日条)に、

レイテ島の我軍は、後方へ迂回した敵のため食料弾薬を悉く奪われ、全滅になった、という。また敵側の報道では、同島の日本軍は餓死的な状態で三十万も捕虜になった、と敵は放送している由。たとい餓死状態になろうと数十万もの日本軍がおめおめと捕虜になるなどは、私には考えられないことだ。

と記している。第二次世界大戦における日本兵の悲劇の源として、『戦陣訓』の「生きて虜囚の辱めを受けず」がしばしば取り上げられるが、それ以前の伝統的感性にも目を向ける必要がある。

四 へ潔さくという型

『奥州後三年記』が記す源義家の、

降人といふは、戦の場をのがれて人の手にかゝらずして、後に咎をくひて首をのべてまゐるなり。…たゝかひの場にいけどりにせられてみだりがはしく片時のいのちをおしむ。これをば降人といふべしや。

という言葉や、『源平盛衰記』が記す、「逃には非、己を嫌也」と言つて戦いを避け、逃げようとする平経正に対する城高家の、

まさなき殿の詞哉、軍の習は不嫌上下、向ふ敵に組むは法也、其義ならば虜にして耻を見せよ。(卷三十八)

といった言葉を見ると、戦場で命を惜しむことが否定され、生け捕りになることは恥であるという考えがあつたことがわかる。また『玉葉』には宇治川の戦いにおける源頼政軍の様子について、

僅五十余騎、皆以不顧死、敢無乞生之色。(治承四年五月二十六日条)

と記されている。こうした武士のあり方に対する認識が貴族社会にも浸透していたことは、源平合戦後、それほど時を置かず成立したと考えられている『松浦宮物語』の描写からもうかがうことができる。唐で戦乱に巻き込まれた橘氏忠が「本国では弓矢の向かへるかた」も知らなかつたにも関わらず、

ただあたに向かひて命を滅ぼして、国の恩に報ずべき。と唐の後に言い、実際に戦場に臨めば、

逃げ走るとも、逃るべきにあらず。いまは同じく死なむ命なれば、敵に向かひてこそ、身を失はぬ。

と言つて、退却しようとする兵を集める様子が描かれる。また「名を惜しみ、恥を知る」ことのない者が捕虜となつたことも語られている。

日本人の死を恐れない態度が、外国に対する優越感となつてゐることを語る説話もある。『宇治拾遺物語』一五五「宗行の郎等、虎を射る事」がそれである。新羅に渡つた壹岐守宗行の郎等は、そこで人喰い虎の騒ぎに遭遇する。宗行は新羅の人に、

あの虎にあひて、一矢を射て死なばや。虎かしこくば、ともにごそ死なぬ。ただむなしうは、いかでか食はれん。この国の人は、兵の道わろきにこそあめれ。

と言ひ、さらに新羅の国の守に、
日本の人は、いかにもわが身をば、なきものにして、まかりあへば、よきことも候ふめり。弓矢に携はらん者、何しかは、わが身を思はんことは候はん。

と言つて虎退治に向かう。そして宗行が虎を射殺した後の新羅の人の様子は、

日本の人は、わが命死なんをもつゆ惜しまず、大きな矢にて射れば、その庭に殺しつ、なほ兵の道は日本の人にはあたるべくもあらず、されば、いよいよいみじう恐ろしくおぼゆる国なりとて、怖ぢけり。

と描かれる。そして宗行郎等を日本の面目を施した者として語り終える。

こうした死を恐れないことに価値を置く伝統的観念はどのようなことを考えさせるのか、諸説を紹介しつつまとめたい。

まず、職業戦士には特有の死に対する自己決定性があったとする考え方を取り上げる。例えば、『美しい自決死』という概念の背後にある象徴的意味は、エリート武人としての至高の誇りであった。サムライは軍事技術を持つがゆえの力によって自己の身体の保有者であり、そして自らに死を課すことで自分の運命を決める自立的能力——自らの死を支配するがゆえに自らの生をも支配する——を示した²⁴という指摘である。戦い殺しあうことを仕事とするがゆえに、己の死に対しても自ら決着を付けることを課していた武士は、そのことよって上位階級でありえた。武士の名誉観念は社会的に下位の人々との境界を維持するために機能しているものでもあった²⁵。また上位階級者の自決、即ち「自己の生の目的と意味のために、死をいわば確実にみずからのものとする」とは、『エリート』が死を高度に個人化していたことを意味し²⁶ており、「大衆におけるあきらめの受容の消極性（受身）は、『エリート』において、自己制御による把握の積極性（能動）へ転化された²⁶」という捉え方もある。

選ばれた者の特質に、己の死を制御できるということがあるとするならば、本稿で取り上げた教材は、それを規範化することに寄与していると言える。

それはここまで見てきたように相対的に下位の者が上位の者に対し要求し、期待するものでもあった。従って来世的なもの

のためではなく、「ひたすらこちらの共同体で生きるということが死ぬことの実質的意味」であり、「目線はあくまで、残された人々、共同体に向かつてなされ」るものであった²⁷。それゆえ「集団秩序によって定義される『責任の遂行』」、その結果としての「集団の秩序の強化」という性格もあった。戦う者の潔い死とは、共同体に半ば儀式として共有されているものだということになる。その儀式を演じる戦士と、それを見る（あるいは見上げる）者の関係は、例えば次のようなものになる。

「私」が知り合いの「江田中尉」の居場所を「飛行長」に尋ねた場面

「どこにいますか、江田中尉？」

「山の飛行場です。逢わなかったのですね。いまごろは、死んでるかもしれません」

死の衝動よりも、死と無造作にいつてしまう飛行長の口調にびっくりした。：飛行長の断定は慰めとか、否定とか、それに類した答えを求めてはいなかった。飛行長の断定は一つのいさぎよい自分に向かつての宣言であり、それに応じる答えはすでに自分のうちにこもっているのである。冷酷に感じられるほど戦場の真実であった。（丹羽文雄『海戦』）

こうした戦いを委ねられた者の「責任の遂行」の自己完結性の強さは、「南雲・斉藤の自殺を聞いたのは、七月六日だった。どうして日本の司令官はやすやすと死ぬのか。アメリカの将兵は納得ができず、議論した。日本人一般が絶賛を贈る『自刃』が、われわれには、死への逃避によってすべての責任を文句な

しに帳消しにしようとする卑劣な行爲としか受け取れなかった。しかもその結果は、当然救われ得る多くの部下にまで、死を強いることになった⁽²⁹⁾といった批判も拒んでしまう。

次に、死に方を美醜の観点で捉えることは物事の全体像を曖昧にしてしまう、ということを取り上げたい。戦争を回顧する時、戦場の兵士たちは職務に全力を尽くした、と語ることが一つの定式になっており、反戦・厭戦を主調音とする小説にも、それはしばしば見出すことができる。例えば駒尺喜美は、夏目漱石の『趣味の遺伝』と大岡昇平の『レイテ戦記』を並べ、どちらも戦争を愚行としつつも、己の死と戦った一人一人の兵士たちのことは決して軽んじていないと指摘する。それは例えば、

死生の問題を自分の問題として解決して、その死の瞬間、つまり機と自己を目標に命中させる瞬間まで操縦を誤らなかつた特攻士に畏敬の念を禁じ得ない。死を前提とする思想は不健全であり煽動であるが、死刑の宣告を受けながら最後まで目的を失わない人間はやはり偉いのである。(『レイテ戦記』)

といった発言であり、これは特攻と同様の絶望的な突撃を敢行した兵士にも当てはめることができよう。銃後の人々が家族の戦死を受け容れる際にも、こうした考え方に頼るしかなかった。吉田満の『戦艦大和ノ最期』には、大和艦上で戦死した二世兵士の「散華」の様子を、戦後「異国ニアル彼ガ母上」に伝えたところ、次のような返信があったことが記されている。

邦夫が最後まで自分のポストにベストを尽くして戦ひ、日

本人として恥ずかしくない死を遂げてくれたといふこと、これ程うれしいことはございません。邦夫戦死の報を聞いて、悲しみの余り三月も寝込んだ私共でしたが、邦夫最期の模様を知り、心から勇氣附けられました。家族一同、邦夫を尊んでおります。

職務にベストを尽くしたというその一点で、戦死の虚しさ、割り切れなさを押し隠そうとした人々は多かつたに違いない。それは同時に「おめおめと捕虜になった人・生き延びた人」たちに居心地の悪さを感じさせることになり、それもやはり、これから後、生きるとはどういうことなのか、まるで見当がつかかなかつた。醜さや空しさだけの人生のような気がする。(城山三郎『一步の距離』)

と、生き方を美醜の観念によって捉えた結果のものであつた。以上のような倫理的美意識による認識方法の問題点について森安理文は、「われわれは真剣に戦つた」という発想のアクセントは、戦つたということにあるのではなく真剣にという形容詞にある。…真剣に、真面目にという形容詞に象徴される行為は、あらゆる思想に優先して絶対不動の位置を確保している。問題はこの『真面目さ』のもつ強固な無思想性であつて、皮肉な言い方が許されるならば、太平洋戦争の惨禍は一人一人の『真面目さ』故に、際限なく拡大されたともい得るのではないか⁽³⁰⁾と指摘する。

戦場ルポライターの加藤健二郎は、二〇〇三年十二月、アメリカとイラクとの戦闘が始まる三ヶ月前のバクダッドを取材し、イラク軍はアメリカ軍に対し徹底抗戦などしないだろうと

いう感觸を得たが、そのレポートは日本の大手メディアに取り上げられなかったと言う。そして「おそらく日本人にとつての戦争は、たとえ負け戦でも全力で一生懸命に戦うものなのだろう」と述べている。⁽³³⁾

一九四五年を境に『平家物語』の読みは大きく転換した。⁽³⁴⁾しかし、『平家物語』の授業案の指導目標に「戦乱という状況の中を懸命に生きた人々の姿を知る」といったものが今でも少なからずあるし、『大造じいさんと雁』の授業でも、残雪の懸命さを読み取らせようとしているものがある。そうした読みの方向性は、戦後、日本人の戦争に対する基本的な関心が、「自分の戦友や身内がどこでいかに『勇敢』に死んだかということ」⁽³⁵⁾に向いていたことと質的には変わらないようにも思う。また学校という教育の場では、真面目に一生懸命取り組んだということが生徒を評価する観点の一つになっていることと、どこか、つながっているような気もする。何かに懸命に取り組む姿を評価することは間違いではない。ただ授業において、懸命に生きた末の最期の姿を様式美として描く教材を扱う際は、それがまさに様式であるということと、その様式の持つ特質や効果とともに押さえ、同時に、何を除外することで様式は成立し得るのか、様式を相対化する視点にはどのようなものがあるのか、といったことまで踏み込む必要があるのではないだろうか。それは、一方で国語教育に求められている批評する力を育てることにもつながっていくはずである。⁽³⁶⁾

教材部分の本文は、『大造じいさんと雁』が東京書籍、『平家物語』「敦盛最期」が学校図書、「義仲最期」が筑摩書房の教科書からの引用である。他は『平家物語』覚一本（日本古典文学全集）、延慶本（勉誠社）、『保元物語』金刀比羅本・『平治物語』古活字本（古典文学大系）、『源平盛衰記』（国民文庫刊行会）、『奥州後三年記』（群書類従）、『玉葉』（名著刊行会）、『松浦宮物語』（日本古典文学全集）、『宇治拾遺物語』（日本古典集成）である。

注

- (1) 実態としての武士道が捉えたいものであることは、佐伯真一『戦場の精神史 武士道という幻影』（二〇〇四・五）に詳しい。
- (2) 「那須与一」の教材としての扱われ方については、かつて拙稿「学校現場で——次世代の平家物語」（国文学）二〇〇二・一〇）で触れたので、本稿では残る三教材について考える。
- (3) 生徒の読みと、それに対する教師用指導書の記述については、福重浩之「大造じいさんと雁」の何が問題か」（『言語文化論叢』第四号、二〇〇七・三）、「戦後からの小学校国語教師用指導書の問題」『大造爺さんと雁』の場合」（『ことばと教育』二〇〇七・四）に詳しい。
- (4) 西原千博「文学教材と文学研究（2）——椋鳩十「大造じいさんと雁」」（『札幌国語研究』第七号、二〇〇二・六）
- (5) 注（1）に同じ。
- (6) デーヴ・グロスマン（安原和見訳）『戦場における「人殺し」の心理学』（一九九八・七）、J・グレン・グレイ（谷さつき・吉田一彦訳）『戦場の哲学者 戦争ではなぜ平気で人が殺せるのか』（二〇〇九・九）等。
- (7) 注（1）に同じ。
- (8) 猪狩友一「戦時下の『少年倶楽部』と椋鳩十の文学——時代の

- 「読み」と作品の表現をめぐって」(『文学の力×教材の力 小學校編——5年』二〇〇一・三)、吉原英夫「大造じいさんと雁」に関する椋鳩十の発言について」(『札幌国語教育研究』創刊号、二〇〇〇・九)、千田洋幸「国語教育研究の歴史認識—忘却される戦争、その他」(『テキストと教育』読むこと)の変革のために」二〇〇九・六)等。
- (9) 畠山兆子「相槌を求める文学 大造じいさんとガン」(『日本児童文学』第三十一巻四号、一九八五・四)
- (10) 高橋哲哉「国家と犠牲」(二〇〇五・八)
- (11) 軍記物語に「思ひ切つ」た武士が多く描かれていることについては、相良亨「日本人の死生観」(一九八四・六)に詳しい。
- (12) 山本博文「武士と世間 なぜ死に急ぐのか」(二〇〇三・六)
- (13) 例えば古山高麗雄「断作戦」は、戦場での惨めな死を遺族に伝えることの難しさをテーマとする。また「郷土」が兵士に見事な戦死を期待し、かつ強いていた雰囲気については、一ノ瀬俊也「故郷はなぜ兵士を殺したか」(二〇一〇・八)に詳しい。
- (14) ドナルド・キーン「日本人の戦争——作家の日記を読む」(『文学界』二〇〇九・二)
- (15) 「大造じいさんと雁」には、大造じいさんが「何と思ったか、また、じゅうを下ろしてしまいました」と描かれているところがあつた。この「何と思ったか」の部分の気持ちを生徒に考えさせることについては議論があるが(田中実「教材価値論を求めて——大造じいさんと雁」から——「日本文学」一九九六・四、石原千秋「国語教科書の思想」二〇〇五・一〇、等)、語りの文体におけるそうした挿入句の機能面からの考察も必要ではないだろうか。
- (16) 高木信「熊谷直実の「へまなごし」——死者の魂を分有する」(『死の美学化』に抗する『平家物語』の語り方』二〇〇九・三)、菊野雅之「敦盛最期」教材論——忘却される首実検と無視される語り収め——(『国語科教育』第六十五集、二〇〇九・三)
- (17) 高橋昌明「武士の成立 武士像の創出」(二九九九・十一)
- (18) 北川忠彦「景清像の成立」(『立命館文学』二七一号、一九六八・一)
- (19) 「平家物語」の「二所」へのこだわりについては注(11)参照。
- (20) 大貫恵美子「ねじ曲げられた桜 美意識と軍国主義」(二〇〇三・四)、同「学徒兵の精神史」(二〇〇六・二)
- (21) やはり教材として採られることの多い「忠度都落」の忠度と俊成との対面場面も、もし延慶本のような描写しか現代に伝らなかつたとしたならば、教科書に採用されることはなかつたのではないだろうか。
- (22) 一ノ瀬俊也「明治・大正・昭和軍隊マニュアル 人はなぜ戦場にいったのか」(二〇〇四・七)
- (23) いずれも半井本の当該箇所には「おめおめ」との語はない。金刀比羅本で多用されている語が半井本にはないという現象はほかにも指摘できる(拙稿「首ねちぎって」という表現をめぐって——源為朝・巴・畠山重忠——「三田国文」47)。このことについては別に考えたい。
- (24) 池上栄子(森本醇訳)「名譽と順応 サムライ精神の歴史的社会学」(二〇〇〇・三)
- (25) アレキサンダー・ベネット「武士の精神とその歩み——武士道の社会思想的考察——」(二〇〇九・四)
- (26) 加藤周一「日本人の死生観」(一九七七・十)
- (27) 竹内整一「日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか」(二〇〇九・一)
- (28) 注(26)に同じ。
- (29) オータス・ケリー「よこ糸のない日本 天皇とデモクラシー」(一九七六・一)
- (30) ジョージ・L・モッセ(宮武実知子訳)「英霊 創られた世界大戦の記憶」(二〇〇二・五)
- (31) 駒尺喜美「漱石における厭戦文学——趣味の遺伝——」(『日本文学』一九七二・六)
- (32) 森安理文「戦争文学論——壮烈ということは果たして倫理か——」(『国学院雑誌』六十九巻第八号、一九六八・八)

- (33) 加藤健二郎『戦場の現在―戦闘地域の最前線をゆく』(二〇〇五・三)
- (34) 山下宏明『『平家物語』の受容―批評のゆくえ―』(『文学』二〇〇二・七・八)、大津雄一「戦時下の『平家物語』」(『国語と国文学』二〇〇八・十一)
- (35) 伊香俊哉「雲南滇西地区における戦争の記憶」(『記憶の比較文化論―戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』二〇〇三・二)
- (36) 加藤陽子は注(22)の「瀬俊也の著作の書評において、「マニユアルの型に自らを没入させて善良な国民を演じるその時、型から心が生み出されていく逆説は、静かだが怖い」(『戦争を読む』二〇〇七・六)と指摘している。授業で伝統的な言語文化としてのある型を扱う際、その型をただ踏襲するだけであるならば、「型から心が生み出されていく逆説」を知らず知らず実践しているという事態を招いてしまうこともあるのではないだろうか。